

第5回
インクルーシブ保育プラスワン
～乳児編～



講師 赤塚 めぐみ 氏

子どもの気になる行動をひも解く
はじめに

私は現在、常葉大学で特別支援教育について教えています。以前は磐田市で、発達の気になる子を受け入れている施設で働いていました。後の磐田市の発達支援センター等で、NICU を利用していた子ども達の療育などに携わっており、その際、NICU に勤務経験のある看護師も一緒に働いていました。

各分野のスペシャリストがそろった環境で、いろいろな子と出会えたことは、今の私にとって大きな財産となっています。

最終的な到達地点

小学校入学までに以下の力がついていれば、支援のたすきをつなぐことができます。

◆言葉で伝えられる子に（要求・交渉スキル）

0歳児のときから「この子は支援が必要だ。」と感じた子は、早い段階からその子に合った支援を受けることができますが、いわゆるグレーゾーンと呼ばれる子の中には、適切な支援を受けてこなかったため、自分の要求などを伝える力が育っていないまま高校生になってしまう子もいます。単位が取れず、高校生活を継続できないかもしれないと個人面談をしても、自分の気持ちや考えを伝えることができないため、子どもも教師もどうしていいのかわからない状態に陥ってしまいます。そして、不登校などの大きな問題に発展してしまいます。

自分のことを自分で語るということは、例えば「ぼく、今イライラしていて、このままだとけんかになってしまいそう。」などと爆発する前の感情の

動きを言葉で表すことです。これは、感情のガス抜きとなるため、トラブルの抑制につながります。

◆「助けて・手伝って」が言える子に

乳幼児を育てている施設は、子どもたちに「自分のことは自分です」ということを大切に保育されていることと思います。自分の身辺処理をすることは生きていく上で必要なことです。しかし、だからといって、人の世話をしたら自分のことができなくなってしまうかということ、そうではありません。人の世話をすることで改めて自分の身辺処理の仕方を学ぶことにつながります。そして、「助け合って、できたね。」と言える経験が、「助けて。」「手伝って。」と言える力につながっていきます。

脳性麻痺で車椅子生活を送る東京大学の熊谷晋一郎准教授が、「自立とは、依存できる先を増やすこと。」とおっしゃっています。基本的には、自分で生活のことをすることが望ましいですが、一人の力で何でもこなすことは難しいので、人の助けを借りることがとても大切なことです。しかし、1人の人だけに助けを求めると、関係がぎくしゃくしてしまうので、「これは、だれに協力を求めたらいいか。」「あのことは、だれに助けを求めたらいいか。」と、いろいろな人に手を貸してもらえ人間関係を築くことが自立につながります。中学生・高校生くらいになって、生きづらさを感じている子は「助けて。」「手伝って。」と言うことができない子が多いです。「助けてって言うっていいんだよ。」「まわりが助けてくれるよ。」と伝えても、決まって「自分の責任だと思っているから、人に頼ることはないと思っている。」という言葉が返ってきます。自分が何とか

しなくてはならないと思って苦しんでいる子どもたちが多いのです。一人で苦しんでいる子どもの中には、ずっと人間関係で失敗を繰り返している子がいます。失敗を繰り返し、誰にも助けてもらえない状況から「自分はダメなんだ。」という考えにいきつき、助けを求められなくなってしまいます。引きこもりになってしまうこともあります。引きこもりのすべてが、環境要因とは限らないのですが、生きづらさを抱えている子どもが、適切な関わりと出会わないまましていると「自分が悪い。」という思考回路を作りやすくなってしまいます。二次障害のその思考は、幼児期から学齢期にかけて作られていきます。二次障害は、周りの大人が作る障害であると考えます。先天性の障害は、もって生まれたものなので、私たち支援する者が受け入れる必要がありますが、二次障害はそこまでに関わってきた人で作られるものであり、先天性のものより厄介で難しいです。こちらが素直に関わろうと思っても、受け入れ難い言動をしてしまいます。しかし、その裏側には、そこまで関わってきた大人の影響を大きく受けてしまったということを理解してほしいです。二次障害を軽減できるのもまた、周りの大人なのです。

ICF に基づく障害の捉え方

WHO で提案されている ICF モデルは、自分の心と体の状態と生活機能、つまり生活のしやすさ・生活の質との関係性について表しています。その人の健康状態・障害の有無などの要素は、生活の質と関わりがありますが、決定づけるものではありません。活動ができず、生活のしやすさが著しく低く、社会参加が閉ざされたとき、障害と位置付けられます。しかし、特性をもつ子どもが、楽しかったと思える時間が少しでも多くなるような保育ができれば、それは彼らの生活のしやすさが向上しているといえます。生活のしやすさは、だれもが変動するものですが、その変動の振り幅が大きいのが、障害をもつ子の特性です。生活しづらい思いをしている子

が幼稚園や保育園にも存在します。個人の因子として、その子が何に興味をもっているのかを知ることによって生活のしやすさが変わってきます。

ICF モデルによる障害児支援の考え方

この ICF モデルの生活機能とは英語で **Life Function** といい、その人の生活だけでなく、命や人生を支えるためのモデルだという意味もあります。その人の生き方を考えていくことが大切なのです。このモデルの支援の方針として、好きなこと、好きな人を増やしていく、よいところを伸ばしていくことを目指しています。今までは「できないところをできるようにして、伸ばしていく。」という支援のイメージがありました。特に、乳幼児期の保育に携わっている保育者は、できなかったことができるようになった喜びを知っているのでも、発達障害の子にも、できないことをできるように目指してしまいがちです。しかし、発達障害の子どもは、発達に凸凹があるので、できないことができるようになるために長い時間を要します。機が熟していないのに、できるようになるまで働きかけてしまうと、子どもたちは「また、先生にできていないって言われてしまう。」と避けるようになってしまいます。できないところをできるようにすることは、悪いことではありませんが、できるところ、よいところを伸ばすような働きかけをお願いしたいです。

一対一の関係の中で育つもの

気になる行動①：あまり話さない

乳児期で気になる表れとして多いのが、言葉です。言葉は、基礎となる力がいくつも重なって出てくるものです。言葉を獲得していく上で必要なのは、動作を真似する力と、指差してコミュニケーションをとる力です。これらが未熟な子どもは、仮に言葉が出たとしても言葉をコミュニケーションの道具として使う力が乏しいです。コミュニケーションの道具として言葉を使えない子は、思考でも言葉を使

うことができません。

指さしは、だいたい生後 10 か月くらいから始まります。指さしをする前は、目を合わせてにこにこしたり、あやすと笑ったりして、コミュニケーションをとっています。この動画は、7 か月のまだ指さしができるいない子が、手が届かない位置にせんべいがあるので、「取ってよ～」と母の顔を見ています。これは、子どもと母親の 2 人の世界になっています。母に、「何してほしいの？」と聞かれ、せんべいを見て手を伸ばし、今度は子どもとせんべいの世界になっています。つまり、指さしが始まる前は、自分と相手という二者の世界なのです。やり取りの繰り返しの中で、指さしが出てくると、自分とものごととの三者の関係を築くことができます。二つのものに注意を向けることができることで、人との安定した関係を維持することができます。

社会性に困難がある子どもは、興味のあることに対しては意識が向くものの、興味がないことには意識を向け続けることが難しいため、言葉をかけても聞き流していることが多いです。

ある強い自閉症で言葉が出なかった子は、あるテレビのコマーシャルのフレーズが気に入って、母親や保育園の保育者と歌うようになり、やり取りが楽しくなりました。真似ができるようになると遊びが広がり、まわりに興味をもつようになりました。発語の前の段階の「まねっこ遊び」の楽しさを知らせることが大切です。

言葉が出始めたがオウム返しが多い、独り言をブツブツ言っているなどの原因の一つとして、やり取りの未学習があります。言葉のやり取りができない子は、キャッチボールも苦手な子が多いです。自分の目の前に転がってきたボールは触ろうとするが、自分の視界から消えてしまった途端に、興味がなくなってしまう探そうともしないという様子が見られます。ボールが行ったり来たりするという遊びの仕組みを理解することが難しいのです。遊びの仕組みを理解すれば、やり取りは生まれます。乳児の遊

びは、いろいろな成長につながっています。まんべんなく、いろいろなことを経験することが大切です。

気になる行動②：ことばの使い方が不思議

オウム返しも会話したい気持ちの表れだと考えます。私たちも初めて聞く言葉に対して、聞き返すことがあります。自閉症の子どもに見られるオウム返しは、それに通じるものがあります。「お名前は。」という言葉掛けに「お名前は。」と返してしまうのですが、繰り返すうちに「あ、お名前はと聞かれたらタロウくと答えたらいいんだ。」ということがわかってきます。やり取りは、真似から生まれるので、オウム返しも大切にしたいです。

自閉症の子どもは乳児期の愛着関係が築きにくく、感覚過敏の子が多いです。乳児期にふれあい遊びをたくさんしたいと思っても、触られるのを嫌がる子もいます。家庭では、遊んであげようとすると機嫌が悪くなってしまうため、放っておくことが多くなってしまい、親子関係がなかなか深まらなくなってしまう。園でも同様です。乳児期の触れ合い遊びなどをまわりに要求できる子は、遊びが発達していきます。しかし、自閉症のように水が流れるのをひたすら見ていることが好きな子は、する人・される人という関係性を考える遊びを経験しないまま大事な時期を過ごしてしまうので、だれがだれをという人の関係性を、言葉で理解することにつまずいてしまいます。私たちは、する人・される人の立場の違いがわかります。なぜそれがわかるかというと、例えば、一本橋こちょこちょをするとき、「最初にわたしがやるから、あとでやってね。」という経験し、する人・される人の関係性を学んでいるからです。自閉症の子どもは、そもそも人と触れ合う遊びを好まない子が多いので、人との関係性を学ぶ経験が少なく、言語の問題を併せもってる子が多いです。子ども同士のトラブルになったときの説明で、どっちが叩いたのか叩かれたのかがうまく言えず、自分が叩いてしまったのに「Bくん（相手）

が叩いた。」と言って誤解を招いてしまうケースが少なくありません。自閉症の子は、する人・される人の立場の理解が難しいので、正直に語っているつもりでも誤解を招き、トラブルを大きくしてしまいます。する人・される人の関係性を理解するためには、交代できる遊びを経験することが大切です。だからといって、自閉症の子が好きではない触れ合い遊びに誘うのではなく、水が流れるのを眺めることが好きな子だったら、まずは一緒に眺めてください。そして、時々水を止めて「水、止まっちゃったね。」「今から水を出すね。」という言葉掛けてください。それから、「じゃあ、今度はAくんがお水を出して。」というように、その子の興味のあるところからやり取りを増やして行ってください。

気になる行動③：奇妙な動き

手を目の前でひらひらさせるのが好きな子やフローリングの線を横目で見ながら辿って往復する子も一見奇妙な行動に見られますが、集団生活に不安を感じて、気持ちの安定を図るためにそれらに没頭していることが多いです。普段関わっている保育者が「今は、これをやって落ち着きたいんだな。」と気持ちの読み取りをすると安心につながります。

気になる行動④：こだわりが強い

こだわりの強い子の中でも、洋服にこだわりのある子は1歳ぐらいからはっきり表れが出ます。こだわりの背景としては、違いに敏感ということがあります。本当に違いに敏感な子にとっては、表情豊かな人の表情がころころ変わる様子が恐怖で耐えられないそうです。保育の仕事をしていると、子どもに対して表情豊かに関わりたいと思うのですが、そういう子もいるのです。ある重度の自閉症の子は、私のことは人として好きだけれど、私の表情がころころ変わるところが苦手でした。その子は、私と話すときに、自分の目の前で力いっぱい手を振って、私の顔がはっきり見えないように手動のモザイク

をかけることを覚えたのです。人と関わりたいが、表情が変わる人の顔を見ることが苦痛だったのですが、その方法を考えてから人と面と向かって話せるようになりました。子どもの中には、私たちが思いつかないような不快さをもっています。変化に不安がある子どもは、人から遠のきやすくなってしまいます。人から遠のくということは、言葉からも遠のき、集団生活からも遠のいてしまいます。安心できる場所を見つけてあげることが大切です。頑張らせることよりも自分にとって安全である場所や方法をたくさん知っておくことが育ちには必要です。安全基地としての役割を果たしていけるようにしてほしいと思います。

言葉が育つことのメリット

「どうぞ」「まって」の力

2歳児くらいまでに言葉を習得していくと、行動を止める力が身についていきます。思いついたことをすぐ行動に移してしまっていた子が、GOサインが出るまで待てるようになると、トラブルのときに抑制がきくようになります。Non-GOのサインで待ち、GOサインで走り出すという遊びを取り入れ身についていくと、だれかの声で止まることから始まり、少しずつ自分の声で止まれるようになります。最終的には、心の中で「今は、止まるときだ。」と自分で自分の行動をコントロールして止めることができるようになります。

3歳に向かっていく時期は、思考力もぐっと育ってきます。育っていく子どもをきちんと育てていくことができれば、手をかけ過ぎずに、支援の必要な子どもにじっくり手をかけてあげる余裕ができるので、よりよい学級づくりにつながっていきます。

第5回 焼津市保育者資質向上研修会
令和4年10月21日(金)
会場：焼津市役所 会議室1B